

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 56

Mar. 10, 2007

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室  
■TEL: 075-322-6103 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [i\\_akano@kufs.ac.jp](mailto:i_akano@kufs.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 29 回大会のご案内

英語コーパス学会第 29 回大会は、4 月 28 日(土)に、同志社大学京田辺キャンパス [〒610-0394 京田辺市多々羅都谷 1-3 (<http://www.doshisha.ac.jp/>)] で開催されます。会場校の西納春雄先生のご尽力に感謝申し上げます。

今大会では恒例の午前中のワークショップのほか、研究発表 4 件とシンポジウムを準備いたしました。研究発表につきましては、運営委員会の査読を経て、1 月 28 日(日)に開かれた大会準備委員会での最終審査の結果、中條清美(日本大学)、内山将夫(情報通信研究機構)、星野守(小学館コミュニケーション)、西垣知佳子(千葉大学)4 氏の「Corpus of Professional English からの科学技術分野特徴語の抽出と教育用語彙表の作成」、杉浦正敏(名古屋大学)、坂上辰也(名古屋大学大学院生)、成田真澄(東京国際大学)3 氏の「英語学習者コーパスにおける作文テーマの影響: 英語母語話者コーパスとの比較分析」の英語教育関係 2 件と、久井田直之氏(日本大学大学院生)の「had better の用法: コーパスを用いての should と ought to との比較を通して」、大谷直輝氏(京都大学大学院生)の「コーパスを用いたより詳細な動詞不変化詞構文の記述の試み: 清掃行為に関わる句動詞を例に」の英語学関係 2 件が選ばれました。第 12 回大会以来、久々に 2 度目の試みとして、2 室の平行セッション形式で行います。

シンポジウムでは、「英語学習者コーパス」をテーマに採りあげました。「英語学習者コーパスの新展開: 会話(NICT JLE) vs 作文(JEFL)コーパスの比較と分析」と題して、投野由紀夫先生(明海大学)のコーディネーターのもとに、上村崇(明海大学大学院生)、小林雄一郎(法政大学大学院生)、鈴木理恵(明海大学大学院生)、早川宏美(日々輝学園高等学校)、三浦愛香(東

京外国語大学大学院研究生)、山田洋文(青山学院大学大学院生)の 6 氏により、多方面から英語学習者の会話コーパスと作文コーパスの紹介と比較・分析が行われます。ご期待ください。

恒例となっております午前中のワークショップでは、シンポジウムと連動させ、投野先生と星野守氏(小学館コミュニケーション編集局)による「日本人英語学習者作文コーパス JEFLL: 概要と検索ツールの紹介」と題したワークショップを開催いたします。参加ご希望の方は、あらかじめ事務局宛にメールでお申し込みください。先着 60 名で締め切らせていただきます。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

以上のような有益で充実したプログラムを用意し、会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。なお、4 月の京都は観光シーズンですので、混雑が予想されます。早めにホテル等の確保をされることをお勧めいたします。

## 『英語コーパス研究』第 14 号について

『英語コーパス研究』第 14 号(2007)の進捗状況をお知らせします。ご投稿いただいた研究論文、研究ノート、シンポジウム発表原稿を査読させていただき、次号の構成は以下の通りになりました。

- ・研究論文 3 編 (投稿数 8)
- ・研究ノート 1 編 (投稿数 1)
- ・シンポジウム発表 3 編 (投稿数 3)

審査委員の先生方には、厳しい時間的制限の中にもかかわらず丁寧に査読作業をお進めいただき、貴重なご助言を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。現在、校正・印刷段階に入っています。本年度より、会誌は会場

渡しを廃止し、6月頃の一括発送となりました。4月大会会場で会誌受け取りを期待されていた会員には申し訳ありませんが、受け取りまでもうしばらくお待ち下さい。

編集委員会委員長  
塚本 聡(日本大学)

#### 学会賞応募規定

第6回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】 英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた35歳以下または大学院修了後の研究歴5年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】 自薦、他薦を問わない。

【提出書類】 1) 推薦理由書(ホームページより入手可)。  
2) 論文の場合は抜刷りまたはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので同封は不要。

【提出先】 事務局

【応募期限】 2007年3月31日

【発表】 2007年度秋季大会

#### John Sinclair 先生の講演会DVDの配布について

昨年8月19日、20日に京都と東京でJAECSも主催団体として開催しました John Sinclair 先生の講演会には、会員の先生方に多数ご参加いただき成功裏に終えることができました。この紙上を借りて厚くお礼を申し上げます。Sinclair 先生も、夏季休暇中にもかかわらず多数の聴衆が参加していたことと、会場の雰囲気から察することができる日本のコーパス言語学に対する関心の深さに感激しておりました。立命館大学で開催しました関西地区での講演会はビデオに収録、DVD で配布することを北海道大学での第28回大会でお約束いたしました。

たいへん遅くなりましたが、このたび、中村がテープ起こしをしたものを Sinclair 先生にチェックしていただいた transcript とともにご希望の先生方に配布する準備が整いました。Sinclair 先生の最新のアイデアを講演会の雰囲気を通して理解するだけでなく、英語圏に大学院レベルで留学希望の学生にとって英語力の目安にもなるようにと、ほぼ逐語的な口述記録を作成いたしました。講演会に参加いただいた会員は勿論、都合で参加いただけなかった会員の方にもぜひご覧いただければと思っております。ご希望の方は以下にその旨お申し込みください。

立命館大学国際言語文化研究所

Tel: 075-465-8164 (直通)

E-mail: genbun@st.ritsumei.ac.jp

担当は宇治橋奈名子さんです。

なお、上記 Transcript から“erm,” “er” などの Filler や繰り返しを除いた報告書は以下として刊行予定です。

Sinclair, John, “Exploring a Corpus,” *Ritsumeikan Studies in Language and Culture*, Vol. 18, No. 3 (In print).

こちららご希望の方は上記、担当者にご連絡下さい。

中村 純作(立命館大学)

#### 新入会員紹介

JAECS Newsletter No. 55 (2006年12月1日発行)以降の新入会員の方は次の通りです(2月20日現在、Sは学生、敬称略)。

鎌倉 義士 バーミンガム大学 English Department S  
佐藤 剛 大鰐町立大鰐中学校  
瀧 由紀子 松山大学経営学部  
西垣 知佳子 千葉大学

#### 事務局から

##### ◇会費納入のお願い

4月28日大会当日の受付は混雑が予想されますので、2007年度会費(一般5,000円、学生3,000円)は同封の払込取扱票を使い4月10日(火)までにお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右

京区西院笠目町6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

2006年度会費未納の方は、2007年度分と併せてお納めください(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。会誌『英語コーパス研究』第14号は2006年度の会費を納入していただいた方のみ送付となります。また、2年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter*などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

#### ◇その他

FORUM欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書を紹介、身近なコーパス研究のエピソードなどでも結構ですでお寄せください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### FORUM

#### 新刊紹介

中村純作(立命館大学)  
jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

最近お送り頂いた新刊、と言っても単行本ではなく、今回は *SJEE* というタイトルの学術雑誌の創刊号を紹介させていただきます。*SJEE* は *Setunan Journal of English Education* の Acronym ですが、A5版の送られてきた雑誌を手にしてざっと目をとした第一印象は、我々 *JAECs* の会誌 *ECS* とそっくりの Format に加えて、細部まで目の行き届いた統一の取れた素晴らしい出来映えでした。前会長今井光規先生が大阪大学を退官後、摂南大学にお移りになり現在は外国語学部学部長としてご活躍であることは我々会員にとって周知の事実ですが、編集者の一人としてお名前が挙がっていたことで納得した次第です。今井先生が初代会長齊藤俊雄

先生のもとで事務局をお勤めになっていた頃に現在の *ECS* の原型が出来上がっていたこと、会誌編集委員会もまだない初期の時代に事務局をお引き受けいただいていた今井先生の献身的な努力が今の *JAECs* の興隆につながっていることを改めて思い起こしました。

英語教室主任の植松茂男先生の "Foreword" によりますと、1982年に発足した国際言語文化学部は新しい社会的な要請に応じて2005年に外国語学部に改組、英語教室もカリキュラムを全面的に改訂、摂南の学生だけでなく広く社会にも目を向けた英語教育を目指すとともに、そのことを念頭にこの学術雑誌が刊行されたことが述べられています。英語教室の先生方が各々の専門領域を生かし、協力して刊行されたものですので、取り上げられたトピックも言語哲学、英語学、英詩、ブルースの起源やカントリーミュージックの語彙調査などの大衆文化、クレオール英語、英語教育の実践報告など多岐にわたりますが、コーパスを利用した研究報告も含まれています。

巻頭に掲載されている、会員の家口美智子先生(摂南大学)と家入葉子先生(京都大学)の共著論文 "Use vs. Non-Use of the Complementizer *That* in Public Speech: An Analysis of the Corpus of Spoken Professional American English" がそれです。両先生が *CSPA*E に関連した研究を継続して行っていることは *YAGUCHI, Michiko, Yoko IYEIRI, and Hiroko OKABE (2004) "Style and Gender Differences in Formal Contexts: An Analysis of sort of and kind of Appearing in the Corpus of Spoken Professional American-English," ECS, No. 11, pp. 63-79* 等で我々も知っていますが、今回は complementizer の *that* を取り上げたものです。紙数の関係で結論まで含めた詳しいご紹介はできませんが、特筆すべきはコーパスには現れない zero-form を、Negation, Tense, Intensifier があるかどうか、adverbial phrase が介在しているかどうかの文脈で観察、考察を加えたことです。非売品の学術雑誌ですので、興味のある方は両先生から抜き刷りをご請求下さい。

意欲的な学術雑誌を創刊された摂南大学外国語学部英語教室の先生方に敬意を表しますとともに、続刊を楽しみにしております。(A5版 144頁/ISSN 1881-6185)

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 57

June 15, 2007

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 29 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 29 回大会は、4 月 28 日(土)、同志社大学京田辺キャンパス恵道館で開催されました。雨模様の天候にもかかわらず 150 名(会員 106 名、新入会員 14 名、当日会員 30 名)という例年の大会より多くの参加がありました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 56 名でした。

恒例のワークショップは「日本人英語学習者作文コーパス JEFLL: 概要と検索ツールの紹介」と題して投野由紀夫先生(東京外国語大学)が星野守・渡辺亮嗣両氏(小学館コミュニケーション編集局)のサポートを得て、中学・高校の英語学習者のべ 10,000 人以上の自由作文を収集した学習者コーパス EFLL Corpus の紹介を行いました。コーパスのデザイン・スキーム、データ収集方法と構築プロセスの説明に加えて、2007 年春に小学館コーパス・ネットワーク(SCN)で無料公開される Web インターフェイスを使って、検索を実習しました。非常に分かりやすく、有意義で興味の持てるワークショップであったとの感想を参加者から聞きました。講師の方々にこの紙上を借りてお礼申し上げます。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して言語文化教育研究センター所長の松久玲子先生にご挨拶をいただきました。引き続き、山内信幸先生(同志社大学)の司会により年次総会が開かれ、2006 年度の決算報告と会計監査報告、2007 年度の予算説明があり承認されました。大会に出席されなかった会員の皆様には決算書と予算書を同封いたしますので、ご確認ください。最後に

学会賞に関して、今回は応募が無かった旨事務局から報告いたしました。引き続き「英語教育」と「言語研究」のテーマでのパラレルセッションがもたれ、それぞれ 2 件の研究発表が行われました。最後に、午前中のワークショップと連動して「英語学習者コーパスの新展開」のテーマでシンポジウムが行われました。それぞれの司会の先生にご執筆願いました概要につきましては、「研究発表」および「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 60 名の参加がありました。野口ジュディ先生(武庫川女子大学)の司会のもと、会長挨拶の後、小迫勝先生(岡山大学)の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8 時にはすべての大会行事が終了いたしました。

今回の大会は参加人数が示すように、京都という地理的好条件と、また英語教育の発表が多かったことも影響してか、参加人数はこれまでに 2 番目に多い大会となり、事務局の予想を上回る盛会でした。本学会の HP 担当でもあり、運営委員として長年学会に貢献していただいている西納春雄先生には、開催校責任者として大会の準備、受付、ワークショップ、研究発表に細かい準備と心配りをさせていただきました。今回から会員になっていただいた長谷部洋一郎先生にも大変お世話になりました。加えて大会実施に協力くださった学生、院生の方々にもこの紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

### 研究発表

Corpus of Professional English からの科学技術分野特徴語の抽出と教育用語彙表の作成

中條 清美(日本大学)

内山 将夫(情報通信研究機構)  
星野 守(小学館)  
西垣 知佳子(千葉大学)

本発表では、中高、大学の1、2年で学ぶことになっている7,300語程度を全てカバーしても理工系の専門で必要な語彙数の77.7%しかカバーできていないことを指摘し、1)複数の統計指標を用いる方法、2)単語散布図(Wordplot)を利用して単語の専門度を可視化する方法の2種を用いて、客観的な精度の高い科学技術分野の特徴的な語彙の抽出を試み、教育用専門語彙表を作成したその過程と、抽出結果の有効性を報告したものである。

学術コンソーシアム PERC (Professional English Research Consortium) が構築した、22分野の科学技術学術雑誌のテキストから構成される、Corpus of Professional English (CPE) の2,000万語を基に、一般的な出現頻度順語彙リストでは頻度が低く選定されにくい特徴語が、上記の方法を用いると、容易に同定できることを論じた。

Wordplotを用いた特徴語抽出による科学技術分野特徴語上位30語のリストの説明では、CPEの頻度順を縦軸に、BNCの頻度順を横軸にした表を提示し、BNCでは頻度が低いが、CPEでは高い語彙など、全体を9分割にして説明し、抽出方法によって結果が相当違ってくることを証明した。

フロアーからも活発な質問が出された。同じ語彙でも分野が違うために意味の違うものや、専門分野で特に多い記号の取り扱いについて、今回の研究ではそれらは扱っていないとの回答があったが、今後の継続的な研究により、さらに精度の良い特徴語の抽出が可能になることを期待したい。

金子 朝子(昭和女子大学)

英語学習者コーパスにおける作文テーマの影響:英語母語話者コーパスとの比較分析

杉浦 正利(名古屋大学)  
坂上 辰也(名古屋大学大学院生)  
成田 真澄(東京国際大学)

本研究は、英語学習者コーパスの構築や分析において、コーパスデータの収集に設定する作文テーマがデータの言語的特徴に影響を与えるかどうかを、NICE (Nagoya Interlanguage Corpus of English) の学習者コーパス (NICE-NNS) と母語話者統制コーパス (NICE-NS) を利用して検証したものである。

分析対象のテーマはSchool EducationとSportsで、同一参加者が両方のテーマで書いた学習者と母語話者それぞれ17件について、Wilcoxon符合順位検定とt検定を用いてToken、Typeなど7項目の分析を行った結果、平均単語長のみが共通して0.1%水準で有意であった。また、2名以上が産出した共通の内容語のうち10文字以上の単語を比較しても、内容語の偏り以外はほとんど違いがなかった。以上の点から、収集時の作文テーマの違いによるデータの言語的特徴への影響はほとんどないと結論づけた。

フロアーから、Type/Token Ratioが文の長さに影響される点を考慮しているかとの質問があったが、NICEは1時間で辞書を使わずに書くという同条件で収集したデータであり、さらに17名は全員上級者であるので、文の長さによる影響は考えていないという説明があった。また、2テーマについて書かれた作文を比較した分析項目が機械的で、テーマへの親密度を検討してはどうかという指摘もあった。今回はReid (1990) が挙げている項目のみを調査したが、複文、短文率などと合わせて今後検討してみたいという回答があった。コーパス研究の基礎となるデータの収集に関する大変有用な発表であった。

金子 朝子(昭和女子大学)

Had betterの用法:コーパスを用いてのshouldとought toとの比較を通して

久保井 直之(日本大学大学院生)

本発表は、3つの助動詞、had better、should、ought toをBank of Englishの一部を用いて分析したものであった。その3つの助動詞の前後に共起する共起関係を調べることを通して、固定

したフレーズでは epistemic/deontic のいずれかが片方の意味でのみ用いられること、中でも it を主語とするパターンとしては had better があまり用いられないこと、さらに had better の用いられる文脈を観察すると忠告を示す用法がもっとも多いことなどが示された。

橋本 喜代太(大阪府立大学)

コーパスを用いた動詞不変化詞構文のより詳細な記述の試み・清掃行為に関わる句動詞を例に

大谷 直輝(京都大学大学院生)

本研究は、構文理論/使用基盤モデルという認知言語学的理論に基づき、brush off the snow と brush the snow off のような語順交替ならびに brush off the snow と brush off the coat のような目的語交替、さらには句動詞の意味が比喩的に拡張されることがあるか否か、といった点について BNC を用いた調査を行なったもので、句動詞の意味を整理するうえで不変化詞の果たす役割が大きいことが改めて確認できる点で構文理論のような考え方が妥当であること、共起の二乗値が高い、すなわち動詞と不変化詞の共起使用頻度が高いものほど、意味がメタファー的に拡張される用法が観察されることなどが示された。

いずれの発表もフロアから複数の質問・コメントがあり、そのいずれもが発表内容の本質に関わるものであり、お二人の今後の研究に資するものであった。それらを参考にさらなる発展を期待したい。

橋本 喜代太(大阪府立大学)

## シンポジウム

英語学習者コーパスの新展開:

会話(NICT-JLE) vs. 作文(JEFLL)コーパスの比較と分析

今回のシンポジウムは JEFLL Corpus と NICT JLE Corpus という2種類の学習者コーパスを用いた研究の可能性を探るという目的で行われた。投野由起夫講師(東京外国語大学)が2つのコーパスの概要を紹介した後、英語学習段

階における語彙習得の発達過程の分析例が4つ提示された。

NICT-JLE vs. JEFLL: 語彙・品詞使用の発達

投野講師が両コーパスからの単語・品詞 n-gram 分析を行った。レベル別に発達していく言語特徴のうち、filler、接続詞、名詞句の構造、to 不定詞、法助動詞、that 節を伴う動詞などがレベル差を顕著に表すものとして特筆されるものであった。

英語学習段階と名詞の内部構造発達

三浦愛香講師(東京外国語大学大学院研究生)は名詞句の内部構造、特に前置修飾と後置修飾の発達過程に関する分析結果を発表した。特に前置修飾に関しては、“all these” のような二重決定詞(double determiner)の構造がレベルによる差が大きいという事実や、冠詞の the が特に会話モードで発現率とレベルの相関が顕著だった点、後置修飾では関係節・前置詞句などの構造がレベル差を顕著にする要素である点などが調査により判明した。

英語学習段階と基本動詞の意味・構造発達:  
動詞 get に着目して

鈴木理恵講師(法政大学大学院生)は基本動詞の下位範疇化構造の発達を調査するため、動詞 get を選び、Swan (2005) に基づいて動詞型を7パターンに分類し、パターン検索および目視で JEFLL、NICT JLE それぞれの get の用例をすべて分類した。その結果、両コーパスとも、比較的単純な構造 (get + N, get + Adj) がレベルを追うごとに使用頻度が高くなる傾向があり、7パターンのヴァリエーションの拡がりよりも顕著に現れたのは NICT JLE の方であった。さらに意味分析の結果も、会話データの方がより広範な get の意味の使用が見られ、NICT JLE のデータの方がより成熟した学習者層を含んでいることを印象づけた。

日本人学習者コーパスに見る Metadiscourse  
Markers の使用傾向

小林雄一郎(法政大学非常勤)・山田洋文(明法  
中学・高等学校)両講師はメタ談話マーカー

(MDM) の発達に関して発表した。MDM は Hyland リストにより perl で自動付与された。その結果、MDM の使用頻度は全般に会話の方が多かったが、作文データの質が話し言葉に近い性格を持っていることも裏付けられた。さらに質的分析として、I、but、文を列挙する際の sequencing の用法などが過剰使用されていることを示した。

最後に投野講師による総括、続いて 20 分間の質疑応答が行われた。4 つの発表に関する質問だけでなく、コーパス構築の方法論やデータ分析の妥当性などに関しても活発な議論が行われ、学習者コーパスの今後の研究の方向性を示唆する有意義な意見交換の時となった。参加者も 150 名にのぼり、非常に充実したシンポジウムであった。

投野 由紀夫 (東京外国語大学)

### 人事に関する決定事項について

大会前日の 4 月 27 日午後 5 時 30 分より開かれた運営委員会において人事案が審議されました。まず、4 年間事務局長として英語コーパス学会の発展に大いに貢献されてきた赤野一郎先生(京都外国語大学)が、この 3 月で退任されました。深く感謝申し上げます。新しく山崎俊次(大東文化大学)が就任いたしました。宜しく願い申し上げます。今回、任期が終了する運営委員は全員継続と決まりました。会誌編集委員は山崎俊次(大東文化大学)が退任し、新しく大和田栄先生(東京成徳短期大学)が就任されました。その他の編集委員は継続です。学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)が退任され、投野由紀夫先生(東京外国語大学)がその任に就かれました。学会賞選考委員の家入葉子先生(京都大学)が退任された後、西村秀夫先生(姫路独協大学)、深谷輝彦先生(椋山女学園大学)、大津智彦先生(大阪外国語大学)の 3 人が新しく加わっておられます。その他の委員は継続です。新しい任務として、郵便局での会費処理の関係で会計の設置が必要との提案があり、承認されました。その担当を石川保茂先生

(京都外国語短期大学)にお願いしました。2001 年から会計監査の仕事を担当していただいた西村道信先生(大手前大学)が退任になりました。長い間のお仕事に御礼申し上げます。新しく梅咲敦子先生(立命館大学)就かれました。今回、退任された先生方のご尽力に対しまして、この場を借りまして、再度、衷心より御礼申し上げます。

### ハンドアウトのダウンロードサービス

第 29 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトを希望される会員に対して、ダウンロードのサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 6 月 30 日までとします。ファイルは PDF となっております。ご希望の方は、石川保茂先生(yasuishikawa@hotmail.com)まで下記のハンドアウトのうちご希望の番号をお知らせください。追って URL をお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定してあります。

1. Corpus of Professional English からの科学技術分野特徴語の抽出と教育用語彙表の作成
2. 英語学習者コーパスにおける作文テーマの影響: 英語母語話者コーパスとの比較分析
3. had better の用法: コーパスを用いての should と ought to との比較を通して
4. コーパスを用いた動詞不変化詞構文のより詳細な記述の試み: 清掃行為に関わる句動詞を例に
5. シンポジウム: 英語学習者コーパスの新展開—会話 (NICT-JLE) vs. 作文 (JEFL) コーパスの比較と分析

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

### 会誌『英語コーパス研究』第 14 号について

ニューズレターとともに会誌 14 号をお手元にお届けすることができました。研究論文 3

編、研究ノート1編、シンポジウム発表論文1部(3編)より構成されています。

研究論文は、19世紀における過去形と完了形の交替について扱った大津論文、there is no V-ing 構文の慣用性について論じた山崎論文、completely などの副詞の生起について意味的差異から論じた Yoshimura 論文の3点です。研究ノート(Fujiwara)は独自の学習者コーパス JUCE 構築について報告しています。語法や統語特性からコーパス構築まで幅広い分野の論文、研究ノートを収録することができました。

シンポジウム発表論文は2006年4月の第27回大会時のシンポジウムを収録したものとっております。「文学テキスト分析におけるコーパスの利用」と題したものであることから、E. Spencer の *Faerie Queene* から H. Fielding の *Joseph Andrews*、さらに D. H. Laurence の “The Captains Doll” に至る幅広い文学作品において、コーパス活用の実例が紹介されています。

投稿者、査読者、編集委員の協力により無事刊行することが出来ました。この紙面を借りて感謝申し上げます。なお、会誌において不具合な点がありましたらお知らせ下さい。

塚本 聡(日本大学)

『英語コーパス研究』編集委員会委員長

会誌『英語コーパス研究』第15号について

『英語コーパス研究』第15号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2007年7月31日(火)

(氏名、所属、原稿の種類とタイトルを下記原稿提出先までお知らせください。)

【原稿提出締切】2007年9月30日(日)

(ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。論文・研究ノートの冒頭には題名のみ記し、氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記した別紙を添付のこと。)

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡

TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336

Email: tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp

【原稿の長さ】

1. 研究論文

英文 70 ストローク×35 行×15 枚以内

和文 35 字×30 行×15 枚以内

(いずれも Abstract (英文)、注、書誌を含む。)

2. 研究ノートは 10 枚以下、その他は研究論文の半分以下。

【書式】第14号所収の論文を参考にしてください。

詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) でご確認ください。

【採用通知】11月頃

【刊行予定】2008年5月

なお、この7月末に設けられた投稿申込締切への募集の有無に関わらず、9月末の原稿締切までに投稿頂ければ、会誌への投稿は可能です。投稿をお待ちしております。

『英語コーパス研究』編集委員会

2008年度の大会日程と開催校

第31回大会 4月26日(土)摂南大学

第32回大会 10月4日(土)東京外国語大学

学会賞について

上記、大会報告でも簡単に触れましたが、3月31日に締め切った今年度の学会賞には他薦、自薦とも応募がありませんでした。本学会の学会賞は、コーパスを利用した英語研究に貢献した書籍、論文等のほか、ソフトウェア開発等も対象にしています。若手研究者への動機づけにもなるよう奨励賞も設けております。今後



も引き続き、募集を行いますので、会員諸氏からの推薦、応募をお待ちしております。

りください。詳細は 8 月 10 日前後に、JAECS の ML でご連絡いたします。

新井 洋一(中央大学)  
東支部支部長

### 第 30 回大会の日程と研究発表募集

2007 年度の秋期大会(第 30 回大会)は 10 月 6 日(土)に立教大学(JR 池袋駅から徒歩 10 分)で開催される運びとなっております。学会創立 15 周年を記念する大会ですので、是非、ふるってご参加ください。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

ML でもご連絡いたしましたが、大会での研究発表を次の要領で募集いたしております。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること。

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究。

【応募方法】冒頭に題名を記し、800 字～1200 字(参考文献表は枚数に含めない)にまとめ、事務局まで添付ファイルで送付のこと。メール本文には氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、電子メールアドレスを明記すること。

【応募締切】2007 年 7 月 2 日(月)必着

【採否決定】2007 年 7 月末日(予定)

【発表時間】発表 20 分 + 質疑応答 10 分

### 新入会員紹介(5 月 20 日現在、S は学生)

石田 知美	名古屋大学 S
伊藤 紀子	同志社大学文化情報学部
今林 修	広島大学大学院文学研究科
衛藤 圭一	京都外国語大学大学院 S
大塚 有紗	明海大学大学院 S
大塚 巖	立正大学
大庭 沙蘭	関西大学大学院 S
川島 捷宏	東京工科大学
近藤 雪絵	立命館大学大学院 S
杉浦 昇	一橋大学大学院言語社会研究科 修士課程 S
長久保 礼一	名古屋大学大学院国際開発研究科 国際コミュニケーション専攻 S
難波 香	昭和女子大学総合教育センター
野村 真理子	新居浜工業高等専門学校
長谷部 陽一郎	同志社大学言語文化教育研究 センター
堀田 秀吾	立命館大学法学部・大学院言語 教育情報研究科
森脇 可奈子	立命館大学言語教育情報研究科 S
安波 誠祐	熊本大学
渡部 拓人	大阪外国語大学大学院 S

### 事務局から

#### 会費納入のお願い

2007 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、同封の払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

### 東支部活動報告

#### JAECS 東支部 9 月研究談話会発表者募集

英語コーパス学会東支部では、9 月の中旬(2007 年 9 月 15 日(土)・16 日(日)のどちらかを予定)、例年通り研究談話会を都内の大学で予定しています。研究発表をご希望の方は、発表者名、所属、発表タイトル(仮題可)、連絡先電話番号をお書きの上、2007 年 7 月末日までに、電子メールでお申込みください。必ず、件名(タイトル)に「研究談話会発表申込み」と記入し、araiguma@tamacc.chuo-u.ac.jp 宛にお送

過年度会費未納の方は、2007 年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第 14 号は 2006 年度の会費を納入していた方にのみ送付いたしております。また、2 年続けて会費未納の場合、*JAECs Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

## FORUM

### John Sinclair 先生を偲んで

中村 純作(立命館大学)  
jnakamur@li.ritsusmei.ac.jp

3 月中旬、正確には 13 日に、Birmingham 大学名誉教授、Cobuild の Permanent Editor-in-Chief で、TWC (Tuscan Word Centre) を主宰する John Sinclair 先生が、突然、Florence のご自宅でお亡くなりになりました。インターネットの世界ですので、彼の他界のニュースはその日のうちに世界中を駆け巡り、驚きの声と偉大なコーパス言語学者の早すぎる逝去を惜しむ声が世界中で挙がりました。このことは JAECs の ML でも皆さん方にお知らせするとともに、学会を代表して奥さんの Prof. Elena Tognini-Bonelli (University of Siena) にお悔やみの手紙を、ICAME の CorporaList にも同様の趣旨のメッセージを送らせていただきました。(http://listserv.linguistlist.org/cgi-bin/wa?A2=ind0703&L=corpora&D=1&F=&5=&P=13658 をご覧ください)。

Sinclair 先生は昨年 8 月、Thomson ELT の招きで AsiaTEFL の福岡大会に来日され、JAECs でも京都と東京で 2 度にわたる講演会を開いていただき、会員諸氏にも多数ご参加いただきました。名誉会員にもなっていた矢先でした

ので突然の訃報に驚くとともに、今後ますます活躍が期待されていた偉大なコーパス言語学者がいなくなったことに加えて、個人的には親しい友人を亡くしたことで、ことのほかさびしく思っております。小生がコーパスを使った研究を続けるきっかけになったのは、今から 20 年以上も前のことになりますが、前任地徳島での Sinclair 先生との出会いでした。1980 年代初頭のことで、まだ「コーパス言語学」という言葉も無い時代に、大規模コーパス構築を謳い、今日の学問的隆盛を導いた先覚者で、年老いても常に新しい知見を見出す洞察力に刺激されつつ、その後もずっと交流を続けておりました。

現在、たまたま、Sinclair 先生の古巣、私にとっても彼との思い出の地、Birmingham 大学に学外研究員として 6 か月の予定で滞在していますが、この偉大な先覚者を偲ぶ行事が次々と行われています。去る 5 月 3 日には、Sinclair 先生の弟子でもあり、かつての同僚で、小生にとっても 15 年前の同僚である Prof. Mona Baker (University of Manchester) を招いての講演会 Sinclair Open Lecture が文学部で、翌 4 日には同じ Birmingham にある Aston 大学で、これもかつての同僚、Prof. Malcolm Coulthard (Aston University) を中心に、本来なら彼も参加したはずのシンポジウムが開かれました。JAECs29 回大会に出席のため一時帰国していた小生はこの 2 つの行事には出席できませんでしたが、5 月 23 日から 27 日にかけて Stratford-upon-Avon で開催された今年度の ICAME の大会、ICAME28 には日本から JAECs のメンバー 2 名、家入葉子先生(京都大学)と事務局長の山崎俊次先生(大東文化大学)とともに小生も参加し、研究発表を行いました。Cobuild の初期の時代の同僚 Prof. Antoinette Renouf (University of Central England) を中心に準備されたこの大会もやはり Sinclair 先生を偲んでの大会となりました。さらに 6 月 14 日には、Birmingham 大学文学部の中庭で彼の名前を刻んだベンチの献呈の式と偲ぶ会が開かれます。

Sinclair 先生が亡くなられたことは、コーパスを利用した英語研究の第 1 世代が終わりを迎

え、次の世代への交代の時期になりつつあることの象徴的な出来事だと初代会長の齊藤俊雄先生も仰っていますが、ここまで、築きあげられてきたコーパスを利用した研究の成果と伝統を受け継ぎ、発展させるのはまさに我々残された者を除いていないことを改めて実感しています。機会があれば繰り返し言っておりますように、会員の皆さん、特に若い会員の皆さんには、Sinclair 先生なき今、第 2 世代の牽引力として今後ともますます研鑽をつみ、努力されることを、ここでも再びお願いいたします。

## ICAME 28 に参加して

家入 葉子(京都大学)  
yiyeiri@bun.kyoto-u.ac.jp

先日の 5 月 23 日から 27 日にかけて、英国 Stratford-upon-Avon で開催された ICAME 28(第 28 回大会)に参加しました。世界各国から 150 名ほどの研究者が、William Shakespeare 生誕の地である、小さな美しい町に集いました。英語コーパス学会から 5 日間を通して参加したのは、中村純作先生(立命館大学)、山崎俊次先生(大東文化大学)と私、家入の 3 名です。中村先生は、在外研究中のバーミンガムからの参加です。私自身、ICAME への参加は初めてでしたので、過去の大会との比較はできませんが、ドイツなどを中心に若手研究者の参加がずいぶん増えてきているという印象をもたれた方が多かったようです。

Plenary では、Stanley Wells, Geoffrey Leech, Joan Beal, Harald Baayen, Christian Mair, Bas Aarts の 6 名が報告を行ない、その他に full papers が 60 本あまり、work-in-progress reports が 20 本あまり、さらにソフトウェアの紹介やポスターなど、充実したプログラムが用意されていました。日本人研究者の発表タイトルを紹介すると、“What’s good and what’s bad in the BNC World Edition? Cross examination of multivariate analyses revisited” (Junsaku Nakamura & Michiyo Kasahara), “Comparative analysis of comparison of

adjectives in Modern English” (Shunji Yamazaki), “Turn-initial words in the Corpus of Spoken Professional American English” (Yoko Iyeiri, Michiko Yaguchi & Yasumasa Baba) となっています。

全体としては、歴史言語学、現代英文法・語法、ディスコース研究、方言研究、社会言語学、ソフトウェア開発、統計学など、異なる分野の研究者が集まるバランスのよい学会であるという印象をもちました。具体的には、歴史言語学部門で異綴りの問題が話題になると、やはり同様の問題を抱える現代英語の方言研究者が議論に参加するなど、興味深いやり取りが見られました。また、大会 4 日目の午後に組まれたパネル・ディスカッションでは、“Global English—global corpora” をテーマに、Anna Mauranen, Joybrato Mukherjee, Pam Peters が簡単な意見を述べたあと、Marianne Hundt の司会で、参加者全員で討論を行いました。議論が政治的な方向に流れすぎたという意見もありましたが、タイムリーな話題を扱った興味深い企画であったと思います。

大会の詳細は、<<http://rdues.uce.ac.uk/icame/>>でも見ることができます。プログラムと共に、大会の雰囲気を示す写真が多数掲載されています。また、最後になりましたが、今回の ICAME は、先日急逝された John Sinclair 教授に捧げる大会でもありました。

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 58

Aug. 31, 2007

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 30 回大会のご案内

英語コーパス学会第 30 回大会は、10 月 6 日 (土)、立教大学池袋キャンパス (〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1 池袋駅から徒歩約 7 分 <http://www.rikkyo.ne.jp>) で開催されます。今回は 30 回目という節目の大会ですが、会場校責任者の鳥飼慎一郎先生のご尽力によって立教大学英語教育研究所の後援を得た大会となりました。

今大会は、第 30 回記念大会として午前中のワークショップのほか、研究発表 5 件と、シンポジウムを計画しております。詳細については同封の「大会資料」をご覧ください。

研究発表については、運営委員の査読を経て、7 月 14 日 (土) に立教大学で開催された大会準備委員会で最終審査を行い、5 件が選ばれました。参考にさせていただくために司会を担当される先生方に書いていただいた研究発表の概要を以下に掲載いたします。

鈴木敬了氏 (大東文化大学) 「古英語における語順決定の要因の解明とデータベースの構築」  
古英語散文の語順に関する研究はかなりの程度なされているが、古英語詩に関する語順研究は少なく、また散文とは異なる現象が見られる。古英語散文から韻文に翻訳されたとされる Boethius の作品を資料とし、散文・韻文という異なるジャンルにおける語順決定要因を明らかにする。さらに、詩形の情報を含む語順研究のための韻文データベース構築を提案する。(塚本聡、日本大学)

大羽良氏 (早稲田大学非常勤) 「Kennedy 以降のアメリカ大統領による一般教書演説からの特徴語の抽出」  
本発表は、ケネディから現代までの 9 人の米大統領が行った一般教書演説からコーパスを作成し、各大統領のサブコーパス中

で用いられる特徴語を複数の統計的手法を用いて特定し、また一般教書演説という政治的言説の中に現れる特徴語が、大統領の施政方針やその当時の社会的状況・彼らの思想とどのように関連付けが可能かを考察したものである。(瀬良晴子、兵庫県立大学)

堀正広氏 (熊本学園大学) 「コーパスと文学的読みの融合: ヘミングウェイの短編を例にして」  
文学の言語研究の新しい方法であるコーパスを利用したアプローチに関して、いくつかの研究や理論はあるが、その長所と短所についての議論は十分に行われていないようである。そこで、本発表ではコーパスを利用したアプローチの長所と短所を簡潔に議論し、小説の言語についての、コーパスに基づく量的・質的研究の調和の実例を示す。(瀬良晴子、兵庫県立大学)

藤原康弘氏 (中国学園大学非常勤) 「OEDs、JUICE 中の日本語からの借用語、貸出語の形式的・意味的特徴の量的分析」  
本発表では、5 種のオックスフォード系英語辞書に採録されている日本語からの「借用語」と、日本人英語使用者コーパスにみられる「貸出語」を区別し、日本語意味分類辞書『分類語彙表: 増補改訂版』(2004) に基づき形式・意味的範疇の分類を行う。その結果を Pearson 2 乗検定・尤度比検定等の各種統計手法を用いて量的に分析し、その結果から今後英語に借用される可能性の高い語彙を提示する。(加野まきみ、京都産業大学)

和泉絵美氏、内元清貴氏、井佐原均氏 (独立行政法人情報通信研究機構) 「英語学習者の使用語彙と発話の通じやすさの関係に関する考察: 誤り語と訂正語の意味的関連性に基いて」  
本発表では、非母語での発話に含まれる誤りのうち、発話の通じやすさに及ぼす影響が大きい

「語彙の誤り」について分析を深める。学習者データに付与されているエラータグを元に、誤り語と訂正語のペアを得、その語義の意味的関連性を複数の尺度を用いて求め、日本人英語学習者の語彙誤りの特徴を量・質の両面から分析する。さらに、この分析によって得た知見の今後の語彙指導改善に向けた活用についても検討する。(加野まきみ、京都産業大学)

30 回を記念する大会として、シンポジウムは、司会を滝沢直宏先生(名古屋大学)が担当され、英語以外の言語におけるコーパス研究の現状を発表していただきます。講師と演題は、前川喜久雄氏(国立国語研究所)「コーパスによる自発音声の韻律特徴の分析」、千葉庄寿氏(麗澤大学)「フィンランド語記述文法とコーパスデータの役割」、大和田栄氏(東京成徳短期大学)「タガログ語データ/コーパスの質と性格」、藤村逸子氏(名古屋大学)「フランスの特徴的なコーパス研究：語彙研究と政治ディスコース研究」です。他言語での研究が英語研究にどのような示唆を与えてくれるかを考えることを目的に企画いたしました。ご期待ください。以下は司会の滝沢直宏先生による概要です。

シンポジウム「他言語コーパス研究の現在：英語研究への示唆」 英語研究におけるコーパス利用は既に半世紀の歴史があり方法論的な蓄積もあるが、他言語におけるコーパス利用の方法から英語研究者が何かを学び取るうとする試みはあまり行われていない。本シンポジウムは、言語によって依拠する理論や研究手法また興味のある方が異なることが多いことを踏まえ、英語以外のコーパス利用の状況から英語研究に対してどのような示唆が得られるかを考える。(滝沢直宏、名古屋大学)

恒例になっております午前中のワークショップでは、会員から要望の多い統計処理を取り上げました。金明哲氏(同志社大学)に「R を用いたコーパスデータの統計解析」と題した講習をしていただきます。参加希望の方は、郵便・電子メール(件名「ワークショップ申込」)で、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局宛にお申し込みください。英語コーパス学会の会員は参加無料ですが、非会員は当日会費 1,000 円

で、ワークショップと大会の両方に参加していただけます。

## 会誌『英語コーパス研究』第 15 号について

前号 *Newsletter* 57 でお知らせいたしましたように『英語コーパス研究』第 15 号の原稿を 9 月 30 日締め切りで募集しております。英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」、「実践報告」、「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」等の会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

### 【問い合わせ先・原稿提出先】

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40  
日本大学文理学部 英文学科 塚本 聡  
TEL: 03-5317-9709 FAX: 03-5317-9336  
Email: [tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp](mailto:tukamoto@chs.nihon-u.ac.jp)  
投稿規定等の詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/>) または *Newsletter* 57 をご確認ください。

『英語コーパス研究』編集委員長 塚本 聡

## 東支部講演会のお知らせ

英語コーパス学会東支部では、以下の講演会を開催いたします。多数の皆様のご参加をお待ちしています。

日時：2007 年 10 月 7 日(日)10:30～12:30

(開場：10:00)

場所：中央大学後楽園キャンパス 3 号館 3F

([http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/access/access\\_korakuen\\_j.html](http://www.chuo-u.ac.jp/chuo-u/access/access_korakuen_j.html)) JR 総武線『水道橋駅』徒歩 15 分、東京メトロ丸の内線・南北線『後楽園駅』徒歩 5 分、都営大江戸線『春日駅』徒歩 5 分、都営三田線『春日駅』徒歩 7 分

参加費：会員無料・非会員 300 円(事前申し込み不要)

講師：高橋 薫(豊田工業高等専門学校)

演題：「BNC の話し言葉を分析して与えられるスタイルの解釈について」

要旨：複数の社会言語学的属性によって仮想構築されるサブコーパスのタグ、あるいは特徴語の特性を明らかにする。それにともない、

多変量統計解析法、頻度の正規化、C 言語、BNC の問題点、PhD(part time course) を修了し、そのあとの論文作成、期間、経費などについて触れる。

東支部長 新井 洋一

### Geoffrey Leech 先生講演会報告

JAECs-ML でお知らせしましたように、英語コーパス学会、ピアソンエデュケーション共催で Geoffrey Leech 先生の講演会を、7月22日(日)に東京大学駒場キャンパスで開催いたしました。“Words, Frequency, Grammar and Dictionaries”と題した第1部と“Corpus Linguistics and the Recent History of English Grammar”と題した第2部からなる2部構成で、Leech 先生から各々1時間のお話を伺いました。日曜日ということもあって、全国から60名以上の参加を得て成功裏に無事終了いたしました。講演会後は有志による懇談会で Leech 先生を囲んでコーパス談義が活発に行われていました。詳細については Forum 欄の石川慎一郎先生(神戸大学)の報告をご覧ください。

講演開催にあたりお世話になりましたピアソンエデュケーション社の秦隆司氏と東京大学の大堀壽夫先生にこの紙上を借り、厚く御礼申し上げます。

### 『英語コーパス研究』の電子化

第29回運営委員会で、学会15周年記念事業として『英語コーパス研究』のバックナンバーを電子化することが企画委員会から提案され、決定しました。この学会が英語コーパス研究会として発足して以来、第14号を数える『英語コーパス研究』ですが、最近ではバックナンバーの中に残部が少なくなってきたり、ほとんどないものが見られます。そこで、今年度の第15号を含む15冊分を、2008年秋の完成を目指して電子化することになりました。このことにより、掲載された先行研究に関する検索も飛躍的に効率化します。具体的な電子化の作業については、次回の運営委員会で検討し、ご報告いた

しますが、関係諸氏のご協力をお願いいたします。

### 学会賞応募規定

第7回の学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた35歳以下または大学院修了後の研究歴5年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。

2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2008年3月31日(月)

【発表】2008年度秋季大会

### 2008年度の大会日程と開催校

第31回大会 4月26日(土)摂南大学

第32回大会 10月4日(土)東京外国語大学

### 新入会員紹介(8月20日現在、Sは学生)

見目 卓之 大東文化大学大学院 S

佐久 正秀 大阪信愛女学院短期大学

鈴木 敬了 大東文化大学

津村 敏雄 東京大学大学院 S

布川 裕行 山形県立長井工業高等学校

事務局から

### 会費納入のお願い

2007 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、同封の払込取扱票を使いお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の方は、2007 年度分と併せてお納めください。なお、会誌『英語コーパス研究』第 15 号は 2007 年度の会費を納入していただいた方にのみ送付いたします。また、2 年続けて会費未納の場合、*Newsletter* などの送付を中止させていただきます。

住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず払込取扱票の通信欄にお書き添えください。

### 会員名簿について

中村会長が以前の大会挨拶で会員名簿の作成について、個人情報観点から新しい会員名簿の作成を実施したい旨のことを話しておられました。そこで、会員名簿の一般・学生会員の所属欄には、大学名、工業高等専門学校、高校名、会社名まで記述して作成いたしました。このような名簿はあまり意味がないので廃止するという学会もあると聞いていますが、JAECS では、その活動の大半を会費からの収入を原資として行っておりますので、どなたにより学会が支えられているかを毎年確認するとともに、収入の根拠を公にすることを目的としています。会員のなかにはお名前や所属の会員名簿への記載を希望されていない方がおられます。そのような方のお名前や所属は、今回も名簿には記載されていません。念のため、申しあげます。併せて、宜しくご理解いただきますようお願いいたします。

## FORUM

PALA に参加して

高橋 薫(豊田工業高等専門学校)  
takahasi@toyota-ct.ac.jp

PALA(Poetics and Linguistic Association、国際文体論学会)の年次大会が 7 月 31 日から 8 月 4 日にわたり、関西外国語大学中宮キャンパスにて開催されました。PALA は、文体論や詩学を主な研究分野とし、言語研究と文学研究を促進する国際学会であると謳われています。これらの研究に関連する広範な分野について各国の動向を散見しつつ勉強できるとあって、150 余名の参加者があり、開催地が極東の日本であったにもかかわらず、国外からの参加者が半数以上ありました。(日本在住の方もお見えですので、やや大げさですが。)

Plenary speakers は Geoffrey Leech 氏(ランカスター大学名誉教授)、池上嘉彦氏(昭和女子大学教授、東京大学名誉教授)、Andreas H. Jucker 氏(チューリッヒ大学教授)、Sylvia Adamson 氏(シェフィールド大学教授)の日本でもおなじみの著名な方々でした。大会に先立ち、Pre-conference として 29 日と 30 日の 2 日間 Corpus Stylistics に関する発表とワークショップが行われました。責任者の田畑智司先生(大阪大学)の導入で始まり、Martin Wynne 氏、Mick Short 氏、Lisa Lena Opas-Hänninen 氏、Leech 氏によって行われました。

大会の事務局長は JAECS の会員である山崎のぞみ先生で、JAECS 会員の方が多数研究発表をされました。敬称略で名前を列記させていただきますと、新井恭子(東洋大学)、今林修(広島大学)、小迫勝(岡山大学)、瀬良晴子(兵庫県立大学)、谷明信(兵庫教育大学)、田畑智司(大阪大学)、平山直樹(広島修道大学非常勤)、堀正広(熊本学園大学)、吉田悦子(三重大学)、そして小生です。実は小生がこの学会を知ることになったのは、昨年の秋に瀬良先生が JAECS のメーリングリストにて本大会の案内を流された時で

して、日本に居ながらにして国際会議に参加できるという魅力にまずもって惹かれたわけです。

参加しての雑感ですが、やはりコーパスは関心事であるということです。その他、発表内容が多岐に及びますので、ご興味のあるかたは、<http://www.pala2007.com/> に公開の abstracts をご参照ください。

会期中は、多くの方と寝食をともにしたことなどもあり、とても友好を深めることができ、終始アットホームな中で進行しました。関西外国語大学中宮キャンパスでは、以前 JAECS の大会が開催されましたので、キャンパスのすばらしさは、すでに認識済みでしたが、優れたスタッフによる本学会運営の円滑さ、図書館やコンピュータールーム等、施設環境の快適さ、食事やアトラクション等の充実度は、海外の国際会議となんら引けを取らない、あるいはそれ以上のものでした。また、セミナーハウスにもパソコン室などの施設が完備されており、それも格安の宿泊費とあって、まさに驚きでもありました。

あまりにも見事な大会運営にどのようなご苦労があったのかと、PALA の設立メンバーである堀先生にお聞きすると、次のようなお話でした。「日本での開催が正式に決定された 2 年前の 2005 年から、豊田昌倫先生(関西外国語大学)を中心として実行委員会が作られました。1 年前からは毎月実行委員会が開かれ事細かに様々な事柄が打ち合わされました。大会数日前から関係者は泊まり込みで最終的なチェックを行ったと聞きます。海外からの参加者が日本的な hospitality のすばらしさに驚嘆していました。」

来年は英国の Sheffield 大学、2009 年はオランダ、2010 年はイタリアでの開催が決まっているようです。

## Corpus Linguistics 2007 の報告

仁科 恭徳(University of Birmingham, S)  
yasunori.nishina.yn@googlemail.com

7 月 27 から 30 日にかけて、英国 Birmingham 大学で Corpus Linguistics 2007 が開催されまし

た。2001 年に発足したこの国際学会も今年で 4 回目を迎え、世界各国から 300 名以上の研究者が集いました。今大会は Birmingham 大学 Department of English の学科長である Susan Hunston 先生と同大学 Corpus Research Centre の所長 Pernilla Danielsson 先生が中心となって、見事に取りまとめ、成功裏に終了しました。特に、BAAL (British Association of Applied Linguistics) の現会長でもある Hunston 先生が、ご自身もお忙しい身でありながら、期間中は学会スタッフに混じって雑務や下仕事に奔走しておられたのがとても印象的でした。

学会初日は、Workshop と Colloquium が計 7 つのトピックに分かれて行われました。2 日目からの 3 日間は、テーマごとに 7 室に分かれての平行セッションで、約 180 名の研究者による発表が行われました。テーマを簡略に紹介しますと、対照言語学、統計学、ツール・ソフトウェア開発、タグ付け方法論、学習者コーパス、コーパスデザイン、文法研究、学術言語研究、句表現、通時的研究、話し言葉コーパス、メディアコーパス、多言語・翻訳コーパス、語彙研究、コロケーション、言語教育研究など、多岐にわたった内容でした。日本からも多数の参加者が来られ、和泉絵美氏(独立行政法人情報通信研究機構)、園田勝英先生(北海道大学)、成田真澄先生(東京国際大学)、堀田秀吾先生(立命館大学)などの他、学生会員で現在 Birmingham 大学に留学中の鎌倉義士さん、近藤史子さん、平田恵理さんも発表されました。3 日目には午前と午後のセッションの合間にポスターでの発表も行われ、阿部真理子先生(高崎経済大学)、鈴木千鶴子先生(長崎純心大学)、中條清美先生(日本大学)、三木望さん(Birmingham 大学 S)などが発表されました。

学会 2 日目に Beijing Foreign Studies 大学の Yueguo Gu 先生が “Segmenting and annotating a multimodal corpus: Agent-based representations of situated discourse” という題目で講演されました。The Spoken Chinese Corpus of Situated Discourse (SCCSD) を例に、ディスコース内外の情報のタグ付け論を示しておられましたが、今後、構築したデータをどのように検索・分析するかが注目されると思います。3 日目は Limerick 大学の Anne O’Keeffe 先生が “The Pragmatics of



Corpus Linguistics” という題目で講演され、スピーチコーパスを用いたディスコース分析の事例をいくつか提示しておられました。最終日には Birmingham 大学の Wolfgang Teubert 先生が “Intellectual property as a link between discourse and reality” という題目で講演され、Google から抽出した書き言葉の用例を取り上げて、批判的談話分析 (Critical Discourse Analysis) を試みておられました。これら 3 名の講演内容はどれも、「ディスコース分析においてコーパス言語学が今後どのように貢献しうるか」をテーマにしており、今後のコーパスを用いたディスコース分析への新たな光が見えたような気がします。

今回の Corpus Linguistics 2009 は、学会創設以来、初めて Lancaster, Birmingham の枠を超えて、英国 Liverpool 大学で開催される予定です。今大会の詳細は (<http://www.corpus.bham.ac.uk/conference2007/>) で見ることができます。プログラムと共に写真も多数掲載されていますので是非ご覧ください。

学会 3 日目に催された夕食会にて、Birmingham 大学に学外研究員として滞在しておられる中村会長のテーブルには、Liverpool 大学の Mike Scott 先生や Teubert 先生が同席されていました。後半には Hunston 先生も加わって、中村会長の交友の広さが垣間見えた瞬間でした。将来、この大会が日本で開催されることもそう遠くないかもしれません。ふと、そんなことが心によぎったイギリスの初夏でした。

## リーチ教授講演会の報告

石川 慎一郎(神戸大学)  
iskwshin@kobe-u.ac.jp

7月22日、JAECS、ピアソンエデュケーション共催による標記の会が、東京大学駒場キャンパスコミュニケーションプラザにて開催された。当日は、猛暑の中、全国より約60名が参加した。

講演会は2部構成で、第1部では“Words, Frequency, Grammar and Dictionaries” というタイトルのもと、*Longman Dictionary of Contemporary*

*English(LDOCE)* の特徴の一つである頻度レベルが取り上げられ、コーパスによる語の頻度調査の重要性について具体的な例証が行われた。語彙頻度はレジスターによって影響を受け、話し言葉で多く使われる語(daddy, exam, go[n])もあれば書き言葉で多く使われる語(authority, institution, king)もある。そこで *LDOCE* では、話し言葉と書き言葉別に、頻度上位のものから順に 1,000 語刻みで S1/W1、S2/W2、S3/W3 というレベルが付されている。これにより学習者は重要な語を効率的に学ぶことができる。コーパスは、従来は *LDOCE* のように 1 言語辞書(monolingual dictionary) に応用される例が多かったが、それはまた 2 言語辞書(bilingual dictionary) にも利用可能なもので、その好例を近刊の『ロングマン英和辞典』に見ることができる。同辞書では、ロングマンの誇る Longman Corpus Network(4 億語)、Longman Learner's Corpus(2,000 万語)に加え、新たに Longman Japanese Corpus(5,500 万語)を構築することで、英語記述の精緻化を目指すだけでなく、英語に付された日本語訳語についても英語のニュアンスを活かした自然な日本語が選ばれている。コーパスによってはじめて可能となる語彙頻度研究の醍醐味を伝えた講演の後には、意味別の頻度調査の方法論や、*LDOCE* から『ロングマン英和辞典』への用例差し替え基準などについて活発な質疑応答が行われた。

第2部では、“Corpus Linguistics and the Recent History of English Grammar” というタイトルのもと、ランカスター大学で完成したばかりの B-LOB(LOB の 1931 年版)の検証結果が披露された。B-LOB の完成により、イギリス英語については 1931 年から 1991 年にいたる 60 年間にわたる変化が概観できるようになった。これを、従来からある BROWN-FROWN と組み合わせれば、20 世紀の言語変化はより立体的に跡付けられる(引き続き、LOB の 1901 年版、および BROWN の 1931 年版も準備中とのことである)。ここで教授は、(1) upon の減少、(2) n't の増加、(3) 法助動詞の微減、(4) 準助動詞(have to, be going to, need to などの)増加、(5) 's 所有形」の増加(前置詞 of の減少と呼応)、(6) 名詞 + 名詞構造の増加、(7) WH 関係代名詞の減少、(8) THAT 関係代名詞の(特に米における)

急増、(9) イギリス英語の suggest *etc* + that + (should +) V パターンにおける should 型の減少と、should 省略型の減少と回復などの具体例を紹介した。60年間の頻度変化にはさまざまなパターンがあるが、それらは(1) 不変型(Steady State)、(2) 一貫上昇型(Steady Increase)型、(3) 一貫減少型(Steady Decrease)型、(4) 増加幅加速型(Increase: Acceleration)、(5) 減少幅加速型(Decrease: Acceleration)、(6) 増加幅鈍化型(Increase: Deceleration)、(7) 減少幅鈍化型(Decrease: Deceleration)、(8) 増減方向変化型(Change of Direction)の8種類に分けられる。また、これらの変化をもたらした原因としては、文法化(grammaticalization)、口語化(colloquialization)、米語化(Americanization)、圧縮化(densification)、民主化(democratization)の4点が考えられるという。興味深い知見が数多く紹介された講演の後には、文法化の位置づけ、which/thatの優先性の問題などについて質疑応答がなされた。

その後は有志でのパーティーとなり、リーチ教授のランカスター大学での教え子を含む参加者は、うちとけた雰囲気の中、教授との有意義な懇談の時間を持つことができた。

60分の小講演が2本であったが、コーパスに関心を持つ者にとってはあつという間の2時間であった。第1講演で紹介された『ロングマン英和』の日本語コーパス活用による訳語チェックについては、英和辞書の「日本語」がわからないという学生も増えている中、今後の辞書編纂にも参考になるものと思われる。また、現段階では訳語の適切性チェックにのみ使用しているようであるが、構築したコーパスを使えば、今後、日英対照言語研究の成果をふまえた新機軸の辞書なども可能ではないかと期待が膨らむ(例えば、“I”の項目に「日本語で『私は』で始まる文は全体の\*\*%しかないが、英語では“I”で始まる文が\*\*\*%にのぼる。英語では主語の明示が必須」といった注記を設けるなど)。

第2講演では、時系列変化を2点でとらえることと3点でとらえることの本質的な違いがわかって非常に有意義であった。2点比較では、「同じか、増えたか、減ったか」しかわからないが、3点比較によって変化がよりクリアにとら

えられる。完成したばかりだというB-LOBの公開が待ち遠しい。

私事であるが、リーチ教授がかつて神戸大学に招聘教員として滞在されていたご縁もあり、後に、教授とMick Short氏の共著による*Style in Fiction*の共訳に関わる機会を得た(原著は今年、第2版が出た)。そのころから数えて、筆者にとっては10数年ぶりの再会であったが、講演会では、当時とまったく変わらない熱気ある教授の講義を受けることができ、真に有意義な一日であった。学会にとっても非常に意義深い本講演会を企画・運営して下さった英語コーパス学会事務局の先生方に心から感謝を申し上げる。

# 英語コーパス学会 Newsletter No. 59

Dec. 1, 2007

■会長: 中村 純作  
■事務局: 〒175-8571 東京都板橋区高島平 1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室内  
■TEL: 03-5399-7372 ■郵便振替口座: 00940-5-250586 (英語コーパス学会)  
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: [yamazaki@ic.daito.ac.jp](mailto:yamazaki@ic.daito.ac.jp)

**JAECS**  
Japan Association for English Corpus Studies

## 第 30 回大会報告

### 概要

英語コーパス学会第 30 回大会は、10 月 6 日(土)、立教大学池袋キャンパスで開催されました。池袋駅から徒歩約 7 分という立地条件の良さもあって 95 名(会員 80 名、当日会員 15 名)の参加がありました。ちなみに午前中のワークショップの参加者は 57 名でした。

午前中のワークショップは「R を用いたコーパスデータの統計解析」と題して金明哲先生(同志社大学)に講師を務めていただきました。コーパスデータを統計的に解析する場合、従来市販の SAS、SPSS、S-PLUS 等の利用に頼ってきましたが、機能が複雑であることや頻繁に出される改訂版にかかる費用等の点で敬遠する研究者が多くいる現状から、無料のソフト R の普及が急速に伸びています。ワークショップでは、実例を使って R の基本的操作、データ解析の方法、推測統計等を解説していただきました。非常に有意義なワークショップであったという感想を参加者から聞きました。アシスタントとして投野由紀夫先生(東京外国語大学)、小林雄一郎氏(法政大学大学院)、石井康毅氏(東京外国語大学大学院)にお世話になりました。講師の先生、アシスタントの方々にこの場をお借りしてお礼申し上げます。

午後の大会では、まず中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶がありました。その中で中村会長は、大会前日の 10 月 5 日に開催された運営委員会で来年 3 月 31 日を持って任期満了になる会長を退任することが承認されたことと、赤野一郎先生(京都外国語大学)が満場一致で次期会長(任期は 2008 年 4 月～2010 年 3 月)に選出され、本人の承諾を得たことを報告されました。その

後、開催校を代表して服部正治先生(立教大学総長補佐)にご挨拶をいただきました。引き続き学会賞選考委員長の投野由紀夫先生(東京外国語大学)から本年度は該当作がなかったという選考結果が報告され、現在、奨励賞に応募が 1 件あるがさらなる応募を期待する旨の話がありました。

研究発表は、第 1 室で 3 件(英語史、語彙の統計処理、文体論)、第 2 室で 2 件(英語辞書の日本語の量的分析、英語学習者の使用語彙)の発表がありました。シンポジウムでは滝沢直宏先生(名古屋大学)の司会のもと、「他言語コーパス研究の現在：英語研究への示唆」というテーマで 4 人の講師の先生方に発表していただきました。日本語、フィンランド語、タガログ語、フランス語コーパス研究の現状を通して英語研究で学ぶべき視点が垣間見えた発表であったと思われま。研究発表、シンポジウムの概要は司会を担当された先生方にご執筆いただきましたので、下記の「研究発表」と「シンポジウム」のセクションをご覧ください。

大会終了後の懇親会には 40 名の参加があり、倉本充子先生(広島国際大学)の司会のもと、中村会長の挨拶、中尾佳行先生(広島大学)の乾杯の発声で懇親会が行われました。研究発表、シンポジウムに関して会場を移しての意見交換、会員同士の交流と情報交換で盛り上がり、午後 8:30 にすべての大会行事が終了しました。

開催校責任者の鳥飼慎一郎先生のご尽力とご協力で盛会に終わったことを喜び、厚くお礼申し上げます。また午前中のワークショップ、大会の受付等で献身的にご協力いただいたメディアセンターの職員の方々とアルバイトの学生諸君にも紙上をお借りして厚くお礼申し上げます。

## 研究発表

### 古英語詩における語順決定要因の解明とデータベースの構築

鈴木 敬了(大東文化大学)

古英語詩散文の語順に関する研究はかなりの程度なされているが、古英語詩に関する語順研究は少なく、また散文とは異なる現象が見られる。散文では、‘heaviness’や‘extra element’などが語順決定の要因として働くことが多いが、韻文では、その傾向は当てはまらないことが多い。当発表では、古英語散文から韻文に翻訳されたとされる Boethius 作 *De consolazione philosophiae* (‘Consolation of Philosophy’) の韻文版をテキストとし、散文・韻文という異なるジャンルにおける語順決定要因を明らかにした。

調査の結果、韻文においては、頭韻パターンが語順決定に大きく影響していることが明らかとなった。典型的には、第 2 半行内で V のみ頭韻の場合には、VM 語順となっている。散文と韻文との対応関係から、Subjunctive に代わり法助動詞の使用が見られることなどから、法助動詞が語順決定に寄与していることが観察された。

File Maker により作成されたデータベースを紹介し、詩形や頭韻パターン、語順を指定することにより、該当例文が表示される実例が示された。

詩形との関連や散文との相関性について、質問がなされた。また、一般に法助動詞は、韻律上の頭韻を構成しないと指摘に対し、実例を示し、頭韻の事実を指摘した。

塚本 聡(日本大学)

### Kenney 以降のアメリカ大統領による一般教書演説からの特徴語の抽出

大羽 良(早稲田大学非常勤講師)

本研究の目的は、ケネディから現代までの 9 人の米大統領の一般教書演説からコーパスを作成し、複数の統計指標を用いてテキストの特徴語を抽出し、上位語の特徴を見ること、それらの語がテキストのどのような性質を表すかを考察すること、また特徴語をもとにテキスト群を

分類し、特徴語が社会的状況や思想性とどのように関連付けが可能かを考察することである。

発表では、一般教書演説の特徴や演説を収集したウェブサイトなど、一般教書演説コーパスの作成についての概要が説明され、続いて各大統領、各演説の基本的語彙指標が示された。

特徴語の抽出には、ダイス係数・コサイン・補完類似度・カイ 2 乗値・対数尤度比と MI3・Log-log 値・zscore の 8 つの統計指標が用いられた。統計指標ごとに異なる特徴語が抽出され、ダイス係数・MI3 では一般的なコーパスで高頻度である語が抽出され、その後一般教書演説に共通と考えられる語が抽出されるなどの説明がなされた。

続いて、抽出された語のテキスト間の重なり度と、特徴語を用いた多変量解析の分析結果が示された。多変量解析の分析では、8 つの統計指標を 2 つのグループに分けて分類が行われ、各大統領の時代的・社会的背景をもとに、分類されたテキストの考察が示された。

質疑応答では、「’s は所有格のものではなくて、It’s などの省略形の’s の可能性はないのか？」という質問に対して、「所有格と考えてよいと思っているが、確認する必要がある」という回答がなされた。また「注目すべき単語を恣意的でなくピックアップできるような何らかの手段があればよい」という提案がフロアーからなされた。

瀬良 晴子(兵庫県立大学)

### コーパスと文学的読みの融合:ヘミングウェイの短編を例にして

堀 正広(熊本学園大学)

本発表では、ヘミングウェイの短編“Hills Like White Elephants”を題材に Corpus Stylistics (Corpus approach to the language of literature)の試みが示された。Corpus Stylistics は、コーパスによって得られたデータとそのデータを分析する言語理論、そして文脈的な解釈とのバランスのとれた言語文体研究である。

コーパスデータとしては、男と女の会話から別々に作られたテキストについて、頻度・コロケーションなどが示された。理論的な背景とし

ては Tannen の男女の会話スタイルのキーワードと Hoey の Lexical priming が用いられた。

ヘミングウェイの作品、特に短編においてはしばしば男女の心のすれ違いがテーマとなるが、本研究では、作品のテーマや文脈を考慮に入れながら、登場人物である the man と the girl の会話のスタイルの違いを主に the, you, we の機能語の分析を通して明らかにした。例えば女の会話中の the は、the trees, the mountains などの現実の具象物を指しているが、男の場合は、the only thing, the best thing など個人の主観性・価値観を示す例が見られるなどの違いが示された。

質疑応答では、「会話の部分はどのように抽出したのか」という質問に対して、「今回は語数が少ないので手作業であるが、大きなコーパスの会話部分の抽出はプログラミングが専門の同僚にソフトを作ってもらった」という答えなどがあった。

瀬良 晴子(兵庫県立大学)

OEDs, JUCE の中の日本語からの借用語、貸出語の形式的・意味的特徴の量的分析

藤原 康弘(中国学園大学非常勤講師)

本発表では、すでに英語辞書に採録されている日本語からの「借用語」と、日本人英語使用者が用いた「貸出語」の特徴を量的に分析し、今後英語に借用される可能性の高い語彙を提示することを目標とした。5種のオックスフォード系英語辞書に採録されている日本語からの借用語と、日本人英語使用者コーパス(JUCE)に見られる貸出語を調査の対象とし、日本語意味分類辞書『分類語彙表：増補改訂版』(2004)に基づき形式・意味的範疇の分類を行った。その結果を Pearson  $\chi^2$  乗検定・尤度比検定等の各種統計手法を用いて量的に分析し、その結果から今後英語に借用される可能性の高い語彙について、形式範疇としては「体の類(名詞)」、意味範疇としては「人間活動・精神および行為」、「生産物および用具」、その中でも「食品」「社会」「心」などと具体的な範疇を提示した。

フロアーからはオックスフォード系辞書以外にも対象を広げるべきではないか、形式・意味範疇に加えて、その語が使用される文脈などの出現の仕方も観点として加えられるのではないかと、OED2 の辞書全体をコーパス的に活用するとさらなるデータが得られるのではないかなど、いくつもの質問・コメントが寄せられた。今後の研究の発展に寄与する可能性のある示唆を多く受け、発表者は、今回は既に利用可能であった日本語からの借用語リストを用いて分析を行ったが、今後は対象とする辞書を広げることや、新たな観点の導入など様々な可能性を検討して、研究を進展させていきたいと回答した。

加野 まきみ(京都産業大学)

英語学習者の使用語彙と発話の通じやすさの関係に関する考察：誤り語と訂正語の意味的関連性に基いて

和泉 絵美(独立行政法人情報通信研究機構)

内元 清貴(独立行政法人情報通信研究機構)

井佐原 均(独立行政法人情報通信研究機構)

本発表では、非母語での発話に含まれる誤りのうち、発話の通じやすさに及ぼす影響が大きい「語彙の誤り」について分析を行った結果が報告された。学習者データに付与されているエラータグを元に、誤り語と訂正語のペアを得、その語義の意味的関連性を複数の尺度を用いて求め、日本人英語学習者の語彙誤りの特徴を量・質の両面から分析した。その結果、意味的関連性が高いほど発話の通じやすさが増すことを定量的に示した。さらに、この分析によって得た知見を、今後の語彙指導の改善方針の提案や語彙指導のための資料作り支援に役立てる可能性について考察した。

フロアーからは、通じやすさの判定は判定者間で揺れが存在するのか、学習者の運用能力レベルによって発話の通じやすさがどのように推移するかなどの質問が寄せられた。判断の揺れについては、実際に存在し、判定者の日本在住経験などが影響すること、今後分散に関する検定を導入する意向であることが述べられた。運用レベルによる通じやすさの推移については、

レベルが上がるにつれて、「通じやすい」と判定された文の割合が増える一方で「全く通じない」文の割合には大きな差がないこと、すべてのレベルを通じて、「通じるか少し推測が必要か不自然に聞こえる」文の割合が最も多いことから、今後の分析の焦点はそのレベルの文となるであろうとの回答がなされた。また、語義の意味的関連性を測定するツールとして Web 上で利用可能な WordNet: Similarity が紹介された。

加野 まきみ(京都産業大学)

## シンポジウム

他言語コーパス研究の現在: 英語研究への示唆

第 30 回大会でのシンポジウムは、「他言語コーパス研究の現在: 英語研究への示唆」と題して行われた。目的は、英語以外の言語におけるコーパス利用の手法や関心の在り方から、英語研究に対してどのような示唆が得られるかを考えることにあった。4 人のパネリストの発表内容は、概略次の通りである。

コーパスによる自発音声の韻律特徴の分析

前川喜久雄講師(国立国語研究所)は、韻律的特徴の精密な情報が付与された『日本語話し言葉コーパス』の利用により、韻律的特徴に関する理論研究・実験研究の成果が、大量の自発音声データに照らして検討することが可能になったことを述べられ、その成果の一部を具体的に示された。

フィンランド語記述文法とコーパスデータの役割

千葉庄寿講師(麗澤大学)は、コーパスが早くから重要視されてきたフィンランド語に関して、コーパスの分析手法についての現状紹介とともに、フィンランド語記述文法の発展におけるコーパスの役割について話された。

タガログ語データ/コーパスの質と正確

大和田栄講師(東京成徳短期大学)は、タガログ語について概観した後、スペイン語・英語からの借用語が多いことに起因するコードミキシングが、話し言葉だけではなく書き言葉においても観察されることを紹介され、この種の研究

におけるパラレルコーパスの構築およびそれを利用した研究の可能性について言及された。

フランス語の特徴的なコーパス研究: 語彙研究と政治ディスコース研究

藤村逸子氏(名古屋大学)は、フランスにおける corpus は「電子化された巨大なデータ」を必ずしもイメージさせないことを述べた後で、フランスでの語彙研究とそれに付随する計量言語学的研究、また政治ディスコース研究について語られた。また、前者の研究においては、言語学と情報工学の研究者の結び付きが密接であることも指摘された。

いずれにおいても、各言語に独特なコーパス利用の現状(あるいは可能性)が示され、同種の研究を英語に関して行う際の有益な示唆を得ることができた。

滝沢 直宏(名古屋大学)

## ハンドアウトのダウンロードサービス

第 30 回大会の研究発表とシンポジウムのハンドアウトの PDF ファイルのダウンロードサービスを行います。期間は、このニューズレターお届けより 12 月 31 日までとします。ご希望の方は、下記のご希望の番号を石川保茂先生(yasuishikawa@hotmail.com)までお知らせいただければ、追って URL をお知らせいたします。なお、発表者の著作権保護の立場から印刷は「許可しない」に設定しております。

1. 古英語詩における語順決定要因の解明とデータベース構築
2. Kennedy 以降のアメリカ大統領による一般教書演説からの特徴語の抽出
3. コーパスと文学的読みの融合: ヘミングウェイの短編を例として
4. OEDs、JUICE 中の日本語からの借用語、貸出語の形式的・意味的特徴の量的分析
5. 英語学習者の使用語彙と発話の通じやすさの関係に関する考察
6. シンポジウム: 他言語コーパス研究の現在: 英語研究への示唆

末尾になりましたが、資料を提供くださいました方々のご厚意に感謝いたします。

## 現会長の退任と次期会長の選任について

大会前日の10月5日午後5時30分から立教大で開催された運営委員会において現会長の退任と次期会長の選任に関する人事案件が審議されました。まず「会長の任期は2期4年を限度とする」と定めた「会長選出に関する内規」により、来年3月31日を持って任期満了になる中村純作会長(立命館大学)の退任に関する案件が審議され、承認されました。引き続き、後任の会長人事について審議が行われ、現会長から赤野一郎先生(京都外国語大学)を推薦する旨の提案があり、満場一致で次期会長(任期は2008年4月~2010年3月)として赤野一郎先生を選出し、本人の承諾を得ました。来年4月摂南大学で開催されます第31回大会から、赤野先生を中心とした新しい執行部体制で学会の運営が行われます。今後とも従来にもまして会員諸氏のご協力をお願いいたします。

## 第31回大会研究発表募集

2008年度春季大会(第31回大会)は4月26日(土)に摂南大学寝屋川キャンパスで行われる運びとなりました。つきましては、発表を希望される方は、下記の要領に従ってe-mailで事務局宛にお申し込み下さい。

[分野] 本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた英語研究。

[応募資格] 本学会員であること。

[発表方法] 発表20分、質疑10分

[応募方法] 冒頭に題名のみを記し、800字~1200字(参考文献は別)にまとめ、メール添付ファイルで送付。メール本文に氏名(ふりがな)、所属・職名、住所、電話番号、メールアドレス明記。

[応募締切] 2008年1月7日(月)必着

[採否決定] 2008年1月末日(予定)

[問合せ] 〒175-8571 東京都板橋区高島平1-9-1 大東文化大学 山崎俊次研究室 英語コーパス学会事務局  
E-mail: yamazaki@ic.daito.ac.jp

## 会誌『英語コーパス研究』第15号について

『英語コーパス研究』第15号(2008)に多くのご投稿をいただき、ありがとうございました。原稿締切時には、8件(内訳は、研究論文6点、研究ノート1点、その他1点)の投稿がありました。現在、査読審査を行っております。昨年同様、6月の刊行を予定しております。

本号では、通常の論文に加え、第30回記念大会のシンポジウムを誌上に掲載する計画を立てております。大会に参加されなかった会員にとっても英語以外の言語でのコーパス言語学の現状について参考となる情報が、紙面を通して得られます。ご期待ください。

塚本 聡(日本大学)  
『英語コーパス研究』編集委員会委員長

## JAECs 東支部活動報告

英語コーパス学会東支部では、第2回講演会を以下の通り開催しました。

講師：高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)  
演題：「BNCの話し言葉を分析して与えられるスタイルの解釈について」

開催日時：2007年10月7日(日)10:30~12:30  
開催場所：中央大学後楽園キャンパス 3号館 3311教室

高橋先生が取得されたPhD論文の内容の部分のご紹介と、職を継続されながらの学位取得に関わる苦労話を、時にユーモアを交えながらお話しいただきました。参加者は15名ほどでしたが、大会翌日のためか関東圏以外からも参加をいただき、質問やコメントが次々出される意義深い講演会になりました。なお、詳細につきましては、Forum欄の高見敏子先生(北海道大学)による東支部講演会報告をお読みください。

東支部支部長 新井 洋一(中央大学)

## 2008年度の大会日程と開催校

第31回大会 4月26日(土)摂南大学

第32回大会 10月4日(土)東京外国語大学

### 英語コーパス学会賞募集

第 7 回英語コーパス学会賞を募集いたします。学会賞は英語コーパス学会の活性化のために設けられた賞ですので、奮ってご応募ください。

学会賞選考委員長 投野 由紀夫

【対 象】英語コーパス学会の目的にてらし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員(個人またはグループ)とする。ただし、奨励賞は英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績(論文の場合、学会誌『英語コーパス研究』に掲載されたものに限る)をあげた 35 歳以下または大学院修了後の研究歴 5 年以下の学会員個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 所定の推薦理由書(学会ホームページより入手)。

2) 論文の場合は現物またはコピー。単行本の場合は事務局で用意するので送付は不要。

【提出先】事務局

【応募期限】2008 年 3 月 31 日(月)

【発表】2008 年度秋季大会

### 新入会員紹介(12月1日現在、Sは学生)

宇佐美 裕子 ランカスター大学大学院 S  
近藤 明日子 国立国語研究所研究開発部門言語問題グループ  
平田 恵理 University of Birmingham S  
松井 順子 明海大学

### 事務局から

#### 会費納入のお願い

2007 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)を未納の方は、同封の払込取扱票をしいお納めいただきますよう、ご協力をお願いいたします。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、石川

保茂(〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学)までお申し出ください。払込取扱票の通信欄によるお申し出はご遠慮ください。

過年度会費未納の会員の方々には「会費納入のお願い」を同封させていただきました。会費納入にご理解・ご協力いただきますよう、お願い申し上げます。なお、会誌『英語コーパス研究』第 15 号は 2007 年度の会費を納入していただいた方のみ送付いたしております。また、2 年続けて会費未納の場合、Newsletter などの送付を中止させていただきます。会費納入等に関するお問い合わせは、石川保茂(yasuishikawa@hotmail.com)までお願いいたします。

## FORUM

### JAECs 東支部講演会報告

高見 敏子(北海道大学)  
takami@imc.hokudai.ac.jp

遠隔地に住んでおりますと普段はなかなか参加できない支部講演会ですが、今回、大会翌日の 10 月 7 日(日)に東支部講演会が中央大学後楽園キャンパスで開催され、大変ありがたい機会になりました。講師は高橋薫先生(豊田工業高等専門学校)、演題は「BNC の話し言葉を分析して与えられるスタイルの解釈について」で、当日は 15 名ほどの参加者がありました。

今回の講演では BNC の spoken demographic のテキストを対象に、年齢による 6 グループおよび年齢・性別による 12 グループに分類したものをサブコーパスとし、各サブコーパス中の 61 の POS タグの頻度について、統計手法には林の数量化 類を用いて、第 1 軸と第 2 軸での分析を中心に、サブコーパス間の関係・特定のサブコーパスに特徴的な POS タグを明らかにした後、特徴語の抽出と使用例、社会階層と性別による 8 グループ分類のサブコーパスとした場合の分析結果の一端が紹介されました。



まず、年齢で分類した6つのサブコーパスの分析では、第1軸の数値で年齢の高いグループから低いグループに並んでいたのが顕著でした。高橋先生はこの軸を *prestigious style vs. vernacular style* と解釈され、*vernacular style* として特徴的なタグには *wh-pronoun*、*wh-adverb*、*wh-determiner-pronoun*、*possessive determiner-pronoun*、*lexical verb の-s form*、*be* および *do* が、*prestigious style* として特徴的なタグには *unclassified items*、*cardinal numbers*、*comparative adjectives*、*existential there*、*of*、*subordinating conjunction* の *that* が指摘されました。

次に、年齢・性別で分類した12のサブコーパスの分析では、先の6つのサブコーパスでの分析で示された第1軸に加え、第2軸で性差が現れることが示されました。このうち、特にグラフ上で特徴的な位置に現れた「14歳以下の女性」と「60歳以上の女性」のサブコーパスを取り上げ、グラフ上で前者と近い位置に現れた所有代名詞・*lexical verb の-s form* と、後者と近い位置に現れた *unclassified items* のうち、それぞれ抽出された特徴語とその使用例が挙げられました。*lexical verb の-s form* に関しては、*I goes* の用例が BNC に 548 例もあるという事実は意外なものでした。

ここではまた BNC の spoken コーパスの表記の誤りが問題となった例として、「14歳以下の女性」に最も特徴的な所有代名詞として抽出された *its* が、原文を確認すると実際には *it's* の誤表記であるものが多かったことについての言及がありました。

最後に他の組み合わせによる分析の一例として、社会階層と性別による8グループ分類のサブコーパスとした場合が取り上げられ、この分析では第1軸で左からほぼ社会階層の高い方から低い方に並んだこと、同じ年齢グループでは女性がすべて右側に現れたことなどが述べられました。

以上の内容は、高橋先生が Lancaster 大学に提出された PhD 論文 *Typology of Registers in the British National Corpus: Multi-Feature and Multi-Dimensional Analyses* のうちの話し言葉に関するご研究の一部分とのことで、最後の30分ほどは講演の第2部として、日本で仕事を続けなが

らイギリスの大学で PhD を修了されたご経験について、必要な期間や諸経費、ご自身の渡航回数や滞在日数、指導教授の交代や指導スタイルの違いへの対応、英文の校閲についてなど、非常に踏み込んだ実情まで伺うことができました。海外の大学で PhD を取得することに関心のある会員も少なくないと思われませんが、実態についてここまで詳細なお話を聞ける機会というのはなかなか無いことで、大変貴重な企画だったのではないかと思います。個人的には、作文力に関しての「格調高い英文は要らない。今書いている文が理解してもらえるか、ということ」を常に考えて書く。」というお話が、短期間に PhD を修了された重要な秘訣と思われる大変印象に残りました。

また、ご本人がお話しになったことではありませんが、PhD 論文の執筆期間は英語コーパス学会事務局を担当されていた時期と重なっておいでだったことを考えると、そういう点でも恐らくは人知れぬご苦労がおりだったことと思われ、頭が下がります。

前半・後半のいずれの講演の後にも活発な質疑応答や情報交換が行われ、大変充実した講演会でした。参加できて本当に良かったという思いを胸に会場を後にしました。

## 新刊紹介

### ベーシック英語史

家入葉子 著  
A5 版 124 頁  
1,600 円+税  
ひつじ書房  
ISBN 978-4-89476-349-4



本書は「まえがき」で著者が述べている通り、従来の英語史のテキストに見られる時代別の章立てではなく「語彙の歴史」、「名詞の発達」、「動詞の発達」等、それぞれの発達史を古英語から現代英語までを通して概観する構成をとって

いる点、ユニークな英語史入門書である。また各項目にはエクササイズがあり身近な内容で学生の自主的な学習を促し、図書館での調査や *Oxford English Dictionary* 等の辞書に触れる格好の橋渡しとなっている。

紙幅の関係で全 15 章すべてを詳細には紹介できないが、特徴ある点をいくつか紹介したい。構成の点で目を引くのは、例えば第 7 章「指示代名詞と関係代名詞」で歴史的に指示代名詞が関係代名詞としての機能を持っていたという視点からの結合であり、第 11 章「非人称動詞と過去現在動詞」は前者が次第に衰退するのに対し、後者は法助動詞として発達する対比から結び付けている。図表では第 6 章「人称代名詞の発達」の she の s がつかない地域を示す現代英語の方言地図、第 9 章「主節と従属節」の中英語後期の方言地図 *A Linguistic Atlas of Late Medieval English* の南部に見られる三人称単数現在の -(e)th など専門書の資料も載せている。第 14 章「否定構文と助動詞 do の発達」では I ne say > I ne say not > I say not のように発達するのではなく、中英語期を通してこの 3 つの構文が共存状態にあったこと、また中英語後期には古くからあった I ne say と新しい I say not が残ったが、近年の英語史で初期近代英語に特徴的とされる I not say は古英語、中英語でも見られ、また初期近代英語でも限定的に韻文で見られるものがほとんどであるとの独自の研究に裏打ちされた記述がある。第 15 章「言語の揺れ」では前置詞のゆれを扱っているが、英米の文法書に different from の記述があるのは母国語話者にゆれがあることを示すものであるとの指摘や、「自分は from しか使わない」という母国語話者が実は different to になっていた、など著者の鋭敏な観察力が随所に見られる。

ベーシックというタイトルがついているものの、著者の広範囲な学識と鋭い観察力に裏打ちされた本書は近年の英語史研究の動向もとらえており、学生ばかりでなく研究者にとっても有益な本と言える。英語史の授業担当者にとって時代別のテキストでは時間の関係上、消化不良になりがちであるが、本書の構成ではテーマを絞って講義しても学生は古英語から現代英語ま

でを通して学ぶため、相応の充足感を得られるであろう。

著者は現在、京都大学大学院で教鞭を執られているが、特に中英語に造詣が深く、また否定の研究は国際的に高く評価されている。中英語期、イギリスの中部方言話者が北と南の言葉に通じていたことが標準英語の確立の強みであったとされるが、中英語を出発点として研究を深められてきた著者は、古英語と現代英語の両方に接点を持ち、本書はまさに格好の書き手を得たと言える。

鈴木 敬了(大東文化大学)  
suzuki@h.biglobe.ne.jp